



保二小だより

[3月号]

家庭数配布

令和7年2月28日 発行
西東京市立保谷第二小学校

けむし

校長 三澤 亘潤

社会科見学や遠足の引率として、貸し切りバスに同乗すると、子ども達の会話が聞こえてきます。何気ない、素のやりとりを垣間見て、私の心は、ほっこりします。

ある日、子ども達が、しりとりを始めました。そこで、「け」のつく言葉を探していた子が、おもむろに「毛虫」と答え、事もなげにしりとりは続きました。「ケーキ」や「毛糸」を予想していた私は、子ども達の見つめる世界に気付いて、うれしくなりました。子ども時代を生きる子ども達にとって、手の届く豊かな宇宙を、大切にしたいと思いました。

本紙1月号の巻頭言「ホニール」のなかで、1年生の研究授業について予告しました。MUFG PARK や東大田無演習林の森林教育パートナーと連携して、ドングリや木の枝、枯れ葉などの自然素材を生かし、やぎさわ保育園の園児との交流を見据えた準備を行ったものです。子ども達の渾身の企画は、以下の10種類です。

- いれたらゴール
- ドングリめいろ
- おちばでさかなつり
- フリスビー
- てんすうころがし
- パタパタどうぶつ
- ドングリレース
- ロケット
- アクセサリーづくり
- 小さいリースづくり



例えば、「てんすうころがし」は、箱に開けた穴にドングリを入れると、ドングリは、細長いパイプを通して卵パックに転がり落ちます。落ちた場所の点数を競うものです。子ども達にとって、このパイプが長い方が面白いので、カットして延長しようと思いますが、ここに、底をカットした透明のペットボトルを挟んだほうが、不規則な動きになって、より面白いという結論に至り、それをみんなで実現します。そこに至るまでの激論！みんなが納得して作業！全員が装置のどこかを持って離さない思い入れ！…どのチームでも、全員が当事者で、話し合いを尽くし、内容がどんどん深まるという、まさに「主体的、対話的で深い学び」を具現化する研究授業となりました。

そして本番、近隣の保育園4園の86名の園児を迎えた「わくわくまつり」では、手作り楽器による演奏で歓迎した後、いよいよ、交流の始まりです。心待ちにしている30分早く到着し、MUFG PARK で散歩した園児達の期待に応える内容で、双方が終始夢中なまま、あっという間に時間が過ぎました。まとめの会も、1年生児童による進行が見事でした。

交流会の提案があったとき、私は、ベーゴマや剣玉、じゃんけん列車やドッジボールといった定番の内容を想像しました。しかし、太田教諭や梁川支援員は、市民科（生活科）の理念からブレることなく、自然からの季節の恵みを足場に、子ども達に向かいました。次期学習指導要領の諮問を見据えて、幼保小の「架け橋プロジェクト」と位置付けた覚悟も見事でした。子ども達の「けむし」が見えなかった己を恥じつつも、先進的な教育活動の開発校を支える教職員達と、温かく賢く豊かに育つ子ども達がいる保谷第二小学校を、私は誇りに思うのです。